Ｎｏ．４１０【２０２０年６月１２日配信】
スペインインフルエンザと青森県（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

5 月 23 日付『東奥日報』朝刊の第 1 面に、新型コロナウイルスとの絡みで「『スペイン風邪』教訓に」という見出しの記事が掲載されました。スペイン風邪とは、今から約 100 年前の大正 7 年（1918）から数年にわたり世界的に猛威を振るったインフルエンザです。日本においては、同年 5 月末には東京を中心とした関東一円に流行しています。

青森県内のスペイン風邪の事例が『東奥日報』に報じられたのは、大正 7 年 10 月 31 日付の「悪性感冒遂に本県侵入」という見出しの記事です。ここで、青森県畜産学校（県立三本木農業高等学校の前身）の生徒 16 名が発病したことを伝えています。原因は 1 年生と 3 年生が修学旅行で東京に行き、そこで感染したものと考えられます。そして、この 16 名はいずれも寄宿舎生であることから、寄宿舎内で集団感染が発生したとみられます。

青森県畜産学校（歴史資料室蔵）

青森市内の初見記事は 11 月 8 日付で、市内の小学校での罹患状況を伝えています。記事によれば 11 月 1 日から欠席児童が出始め、7 日に長島小学校はじめ 4 校の状況調査をしたところ 250 人の児童が欠席し、学校医の診察で 400 人が登校はしているものの罹患していることが判明しました。さらに翌日の記事では、4 校の総児童数 6,488 人のうち 642 人が欠席し、1,019 人が罹患していました。感染力の強さがうかがえます。さらに教職員も罹患し、総数 107 人のうち 15 人が欠勤し、38 人が罹患していました。もちろん、学校は休校となります。

新聞報道では学校の事例が多いのですが、当然感染は一般に広がりをみせ、11 月中旬には県内 2 市 48 町村に及び、罹患者は 35,204 人、うち 14 人が亡くなったといいます（11 月 17 日付）。そして郡部では、集落の住民のほとんどが罹患するという記事がみえるようになってきます。郡部には無医村も多く、こうした村のひとつ上北郡四和村（現十和田市）では「元来同村には開業医もなく村医もなけれは、患者は病床に呻吟して死を待つ許り」（11 月 28 日付）という状況に陥っていました。患者は朝の時点で軽症でも、夕方には肺炎を併発し重篤化することもあったようで（12 月 12 日付）、適時適切な医療を受けられるか否かで生死を分けることもあったようです。

青森県内での流行は、沈静期をはさみながらも大正 10 年まで続きます。流行長期化の背景には医療のみならず、予防策や衛生観念の問題なども関わってきます。これらの点についても、いずれ紹介していこうと考えています。そして、歴史を通じて「コロナの時代」を私たちが暮らしていく手がかりを得られたら…と思っています。